



人生の最終段階への“おもてなし”に求められること

2013年の流行語の1つに「おもてなし」が選ばれました。東京オリンピック誘致に用いられた言葉です。そして、2020年には、海外から多くの人が日本にやってくることでしょう。おもてなしをするためには、外国語を話せるボランティアが多数必要になります。どうしたら、もてなす人材を育てることができるのでしょうか？海外生活経験者であれば、特に語学の心配はいらないかもしれません。しかし、日本で生活をしている多くの人は、外国語を話す機会はほとんどありません。もし、語学勉強の経験のない人が、外国の方を「おもてなし」するならば、それなりの教育が必要になることは明らかです。

では、外国から来る人を、人生の最終段階で悩む人とその家族に置き換えたらどうなるのでしょうか？2025年問題として、多死時代が来ることは明らかです。急性期の病院で対応することが困難になる中で、住み慣れた地域で「おもてなし」する人が必要です。緩和ケア病棟などで働いた経験のある人であれば、関わるすべを知っています。しかし、多くの医療・介護従事者は、看取りそのものの経験がほとんどありません。どのような教育内容があれば、よいのでしょうか？

海外から来た人に声をかけるために必要な語学を学ぶのと同じように、地域で人生の最終段階を迎えた人と関わることは、容易ではありません。わずか2-3日の研修で外国語を習得できないように、人生の最終段階へのおもてなしも、2-3日の研修で体得できるものではありません。短い時間でも、対応できるためには、知識を伝えるだけではなく、苦しむ人に対する援助とは何かについて、対人援助の本質を習得する必要があります。

めぐみ在宅クリニックでは2013年より、看取りに対応できる地域スタッフ養成プロジェクトを開始しております。ここでは、地域で人生の最終段階を迎えた人へ、援助が提供できる学習課題を挙げ、それぞれが学習・研修できるような取り組みを行ってきました。

死の臨床の現場では、日に日に弱っていく人を前にして、何をしたら良いのかを言葉にする力が求められます。具体的には、顔の表情を大切にします。関わる私たちの意識は、“どんなときに、その人が穏やかな顔になれるのか？”に注目します。穏やかになれる条件は人によって異なることに気づきます。同じ病気、同じ家族構成であったとしても、ある人は、最期まで徹底抗戦することが穏やかであったり、ある人は、自宅で家族に囲まれて過ごすことが穏やかであったりします。自分が思う世界観を一時停止して、相手の世界観を大切にします。

もう少し具体的な展開は、次の4つを挙げます(めぐみ在宅援助モデル)。
 1. 相手の苦しみをキャッチする。ここでは、相手の希望と現実の開きを意識します。
 2. 相手の支えをキャッチする。その人の支えになるものはどのようなものか？を意識しながらキャッチします。
 3. どのような私たちであれば、相手の支えを強めることができるのかを知り、実践する。“苦しんでいる人は、自分の苦しみをわかってくれる人がいると嬉しい”ということ意識しながら、援助的コミュニケーションの基礎である聴くことを大切にします。
 4. 支えようとする私たちの支えを知る。死の臨床の現場は決して良い話だけではありません。力になれなくて逃げ出したく

なることがあります。真の力とは全ての問題を解決できる力ではありません。力になれない弱く無力な自分を認めた上で、なおも逃げないで関わり続ける確かな力が求められます。誰かの支えになろうとする人こそ、支えを必要としています。

何気ない言葉で人は嬉しくなったり、傷ついたりします。苦しむ人への援助について、医療を専門としない介護や家族にも、わかりやすい言葉で伝えて行く必要があります。多死時代にそなえて、地域で人生の最終段階の人とその家族を“おもてなし”する人が必要となります。暖かい人間性、寄り添うケアという抽象的な言葉ではなく、具体的に“私にできることはこれであり、このことにより、苦しむ人への援助を行うことができている”と言葉にすることを通して、どんな病気でも、どこに住んでいても安心して最期を迎えることのできる社会が来ることを夢見ています。

(小澤竹俊)

新しいスタッフが増えました

この春に、めぐみ在宅クリニックでは、新しいスタッフが増えました。非常勤医師として福崎浩治先生(水)、真鍋周太郎先生(木)、名倉俊輔先生(金)、濱田なみ子先生(土)が赴任されました。また、看護師として真庭こずえさん、訪問診療サポーターとして島津綾子さん、地域連携室企画係として小関久子さん、地域連携室相談員として岡田節子さん、ドライバーとして阿部久義さんが入職されました。5月と9月に常勤医が1名ずつ増える予定です。在宅緩和ケアの志を持つ仲間が増え、診療の実践のみならず、様々な緩和ケアの研修会を企画できる体制が整いつつあります。めぐみ在宅クリニックでの経験が、地域で緩和ケアを学びたいと願っている多くの事業所に届くように、企画をして参ります。ご期待ください。

第10回追想のつどいを開催いたしました

4月12日(土)当クリニックを会場に追想のつどいを開催いたしました。ご遺族様、在宅看護に携わったスタッフ様にお集り頂き大切なお話をたくさん聞かせて頂きました。笑いあり涙あり…瞬間に終了の予定時間となりました。ご遺族皆さまの癒しとなれば幸いです。



診療実績

	2006-2010年	2011年	2012年	2013年	2014年1-2月	3月	2014年計	総計
訪問回数	10934	4907	5299	5281	889	419	1308	27729
自宅永眠	557	203	163	164	37	14	51	1138
施設永眠	36	9	23	28	4	3	7	103
在宅(自宅+施設)	593	212	186	192	41	17	58	1241
病院永眠	126	61	63	38	2	2	4	292